〔報　告〕

妊娠初期から産後1か月における初めて父親となる夫の体験

保田ひとみ[1)]　畑下　博世[2)]

要　旨

本研究は，妊娠初期から産後1か月における初めて父親となる夫の体験（以下，夫の体験）を縦断的に明らかにすることを目的とする．研究デザインは質的記述的研究であり，初めて第1子を迎える夫4人を対象に妊娠初期から産後1か月において，それぞれ半構成的面接を行い，データを継続的に比較分析した．

分析の結果，夫の体験として，15個のカテゴリーが抽出され，これらはさらに，夫自身，妻，胎児／第1子へ向けられた体験に分類された．夫の体験は，妊娠初期に，親になる思いを抱いて【妻の妊娠を受容する】ことから始まり，夫自身，妻，胎児／第1子に向けられた夫の体験が相互に関連し合うことによって，産後1か月では，【心温まる3人家族を形成する】に至り，幸福感で満たされるものであった．夫の体験がこのように発展的に展開されたのは，【妻の妊娠を受容する】と【良好な夫婦関係を保つように努力する】の2つの体験が要になっていたと考えられた．また，夫は妻と胎児／第1子を支援する一方で，【初めての妻の妊娠・出産と育児に伴う心配や困難に向き合う】体験や，「自分の子ども」「父親」について自問を繰り返す体験もしていた．以上より，初めて父親となる夫への援助として，妊娠初期から親になる思いを抱き，良好な夫婦関係を保つ努力をすることの重要性や，父子関係の形成について情報提供をする必要性などが示唆された．

キーワード：夫／父親の体験，第1子，妊娠，出産，産後1か月

Ⅰ．はじめに

少子社会において，育児をする上でのモデルが減少している[1)]中で，子育て世代の父親の育児参加は近年増加傾向にあり[2)]，父親の役割に関する支援が求められている[3)4)]．また，妻の妊娠の受容と母性課題の獲得には，夫のサポートが特に重要であり[5)]，父親役割に関する先行研究では，妻への気遣い[6)]や良好な夫婦関係[7)8)]，児への愛着[9)]などの重要性が明らかにされている．一方，親になる過程では夫にも妊娠初期から心身の変化がみられ[10)]，過重労働や職場環境が家庭役割にネガティブに作用する[11)]．したがって，父親となる夫の立場を理解した上で，妊娠初期から夫が妻を支援しながら父親としても発達できるように援助する必要がある．父親になる夫の立場を理解するには，妊娠初期から妻が一番手助けを求めている産後1か月[12)]において，夫が夫自身，妻，胎児／第1子に対して，どのような気持ちを持って，行動しているのかを理解することが前提となる．そこで，本研究では，初めて父親となる夫への援助の示唆を得るために，妊娠初期から産後1か月における初めて父親となる夫の体験（以下，夫の体験）を縦断的に明らかにすることを目的とする．なお，本研究で用いる「初めて父親となる夫の体験」の操作的定義は，「初めて父親となる夫が妻の妊娠を知ってから，夫自身，妻，胎児／第1子に感じた気持ちと行動」とした．

1）秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻
2）滋賀医科大学看護学科

II．研究方法

本研究の研究デザインは，夫の体験について記述する質的記述的研究である．対象者は，1施設のA助産所で第1子の出産を予定している妊娠初期の妻の夫である．助産所を研究施設に選定したのは，助産所での出産を希望する妊婦は主体性が高く[13]，夫も妻の妊娠・出産・育児に関心が高いと推測したことや，夫も助産師と関わる機会が多く，妊娠初期から妻への支援を考えられる環境にあることより，本研究の目的に応じていると考えたからである．

データ収集は，妊娠初期から産後1か月において，妊娠初期・中期・末期，産後早期・1か月の5期を目安にして，それぞれの夫に5回の半構成的面接を縦断的に行った．調査期間は，平成17年10月～平成18年12月であり，面接は対象者の希望日時・場所で行った．面接の対象者は夫であるが，夫と妻の基本情報については，1回目の面接時に両者から口頭で得た．また，夫婦の希望により妻も面接に同伴した．妻の同伴があった面接は，妊娠期では1～3回の全てに4人，産後早期では2人，産後1か月では3人であった．1～5回の面接では，「妊娠初期・中期・末期，産後早期・1か月における夫の夫自身，妻，胎児／第1子に対して感じた気持ち，心掛けていること，とった行動」などを中心に尋ねた．面接内容は，研究依頼時と各面接時に夫と妻の承諾を得て録音し，逐語録を作成した．1回の面接時間は，約25分～70分（平均約50分）であった．

データ分析は，妊娠初期・中期・末期，産後早期・1か月のそれぞれの時期における夫の夫自身，妻，胎児／第1子に対して感じた気持ちと行動に焦点を当てコード化し，コード同士の類似性と相違性を継続的に比較しながらサブカテゴリーを抽出し，さらにそこからカテゴリーを抽出した．また，カテゴリーを，夫自身，妻，胎児／第1子へ向けた体験に分類すると共に，カテゴリー間の関連を検討した．分析過程では，それぞれのカテゴリーの意味内容を何度も見直し共同研究者と検討を重ねた．

倫理的配慮は，夫と妻の両者に研究の目的・方法，研究参加の自由意思尊重と中断による不利益がないこと，面接対象者は夫であること，妻の基本情報は妻から1回目の面接時に得ること，プライバシーの保護などについて口頭と文章で説明し，両者が同意できる場合に夫と妻の連名で同意書に署名を得た．なお，愛知県立看護大学研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した．

III．結　果

1．対象者の背景

対象者は夫4人であり，全ての夫が今回の妊娠を妻と共に望んでいた．夫と妻の年齢は20歳代後半から30歳前半（夫平均29.8歳，妻平均28.3歳）であった．夫は全員が有職者であった．面接時期は1回目が妊娠11～17週，2回目が妊娠19～21週，3回目が妊娠35～36週，4回目は産後4～14日，5回目は産後36～56日であった．

2．妊娠初期から産後1か月における初めて父親となる夫の体験

分析の結果，夫の体験として，15個のカテゴリーが抽出された．そのうち，夫自身へ向けられた体験は11個，妻へ向けられた体験は1個，胎児／第1子へ向けられた体験は3個であった（表1）．夫の体験の関連を図1に示す．夫の体験は，妊娠初期に妻から妊娠を告げられると，親になる思いを抱いて【妻の妊娠を受容する】ことから始まり，夫自身，妻，胎児／第1子に向けられた夫の体験が相互に関連し合うことによって，産後1か月では，【心温まる3人家族を形成する】に至り，幸福感で満たされるものであった．また，【第1子の誕生を喜ぶ】は，妊娠期の夫の体験によって得られたものであると共に，産後における夫の体験を一層促すものであった．

以下，カテゴリーは【　】，サブカテゴリーは〔　〕で示し，夫の言葉には「　」，研究者が補った内容には（　）を用いて，各カテゴリーの内容を説明する．

表1．妊娠初期から産後1か月における初めて父親となる夫の体験

分類	カテゴリー	サブカテゴリー	コード
夫自身へ	妻の妊娠を受容する	妻の妊娠を喜ぶ	妻の妊娠を純粋に嬉しいと思う 妻の妊娠が確定し，良かったと思う
		親になる思いを抱く	子どもが少し大きくなったくらいのことを想像し，楽しそうだと思う 第1子が加わった生活は楽しそうで，良いと思う 話しあって，解決するような，アットホームな家庭を理想に持つ 子どもと遊びたい／寂しい思いをさせたくないと思う
	良好な夫婦関係を保つように努力する	夫婦仲の良いことが，子育てに重要という思いを持つ	夫婦仲が良いことが子育てに大事という思いを大切にする 夫婦仲が良い家族を理想のモデルにする 夫婦仲が良いことが子育ての基本だと思う
		良好な夫婦関係を保つように努める	努めて夫婦の対話の時間を作る／出産前の2人の時間を大切にする 妻への信頼・尊敬・感謝の気持ちが，産後はさらに高まる 妻への感謝の気持ちを，手助けという行動で表す 産後も，妻との関係は母親というより妻として関わる 妻から感謝，信頼されていることを嬉しいと思う 互いに言いたいことが言える仲でありたい／気を使って，仲良くやっていきたいと思う 妻より第1子を見ていた比重が大きかったことに気付き，反省する
	妻の妊娠，第1子の誕生により，責任感を高める	経済面を調整する	妊娠・出産・育児に備え，無駄遣いをしない／貯蓄する 育児用品の消耗や今後の育児を見越し，さらに働こう／貯蓄しようという気持ちが高まる
		第1子の養育に対する期待を高める	妻の出産を控え，第1子誕生後の生活にやりがいを抱く 第1子が人間的に育ってくれるような，良い環境を作りたいと思う
		「人としての責任」をさらに自覚する	第1子の誕生により，夫のこれまでの「人としての責任」をさらに大きくする 妊娠・出産・育児に対して得られる多くの支援に感謝する 妻子を支援するには，夫の健康が大事だと気付く
	初めての妻の妊娠・出産と育児に伴う心配や困難に向き合う	妻の妊娠・出産と育児に伴う心配事が出現する	妻の腹部の張りの出現／安静の程度／胎児の健康と成長／腹部の増大などを心配する 胎動前の妻の腹部を触る力加減／第1子の抱き方／第1子の泣きなどに戸惑う
		妻と胎児／第1子への支援に困難感を抱く	つわりの姿を見ること／妻への支援の空回り／妻との生活時間のズレによる睡眠不足などに困惑する 喫煙制限が辛いという思いを抱き続ける 夜泣きの対応に困惑する 夜泣きに困惑した妻を見て，辛いと思う
		妻と胎児／第1子への支援に伴う困難感に対応する	つわりの妻の里帰りを受け入れ，夫のつわりの困難感へも対応する 夫の要望を我慢し，妻に合わせるように努力する／夜泣きはもっと大変だと思い直す 喫煙制限に伴う困難感より，胎児／第1子の健康を優先する 第1子の泣きの理由を分ろうとする 夜泣きに困惑する妻に，夫も一緒に向き合い，対応する 困ったことは，妻の実家，専門家，友人，育児雑誌などから支援と情報を得て対応する
		妻の妊娠・出産と育児に伴う心配事や困難感が安心に変わる	妻のつわり／お腹の張りなどが落ち着き，安心する 胎児の推定体重が2.000gを越える／第1子の抱き方が分かるなどにより，安心する 産後1か月において，授乳前の泣きが分かるようになる 第1子の笑顔で，泣きの困難感が解消される いろんなことがあったが第1子が無事に生まれ，すくすく育ってくれていることが嬉しい
	無意識に，中だるみの状態になる	胎児存在への意識の薄れに気付く	外見から妻の妊娠が分からず，胎児存在に対する意識が薄れていた 4週間に1回の妊婦健診の時期は，日々の生活の中で胎児存在の意識が薄れる 妊娠初期より，胎児のことを考えなくなっていた／話し掛けなくなっていた 夫の胎児存在の認識の薄れが，妻のストレスを蓄積することに気付き，反省する
		妊娠前のような生活に戻る	つわりの消失で妻が落ち着き，夫自身も落ち着く／中だるみ状態になる 妻のつわりが消失し，胎児がいることを忘れ，普通に行動していた 妻が普段どおりの生活ができるようになり，知らないうちに普通の生活を要求していた
	出産と育児の準備をする	出産の準備をする	出産場所は妻の意見を尊重して決定する 出産に向けて物品の準備／仕事の調整／知識の補充などを行う
		育児の準備をする	育児用品と第1子の部屋を準備する／育児用品の選択に迷うが，決めて買うと喜びが湧く 沐浴の技術を習う
		第1子の誕生を心待ちにする	無事な出産を，ひたすら願う 第1子に早く会いたいと思う 出産に対する不安より期待が大きくなる
	第1子の誕生を喜ぶ	無事な出産を喜ぶ	母子共に，無事な出産を喜ぶ 第1子が自然に生まれてきたこと／抱くことができたことを喜ぶ
		出産体験に満足感を抱く	夫や父親として／夫の思いに応じた出産への参加ができ，良かったと思う 妻からも感謝され，嬉しいと感じる
	胎児／第1子は「自分の子ども」という実感と自問を繰り返す	胎児は「自分の子ども」という実感と自問を繰り返す	胎児の成長を確認することにより，「自分の子ども」という実感が湧いてくる 胎児は，人間の子どもというより，宇宙人／妖精／天使のような感じだと思う 第1子を見るまで／抱くまでは，「自分の子ども」という実感が湧かない
		第1子は「自分の子ども」という実感と自問を繰り返す	第1子を抱き／第1子の温もりから「命」を感じ，「自分の子ども」だと実感する 第1子が夫に似てくる／父親似と言われることなどから，「自分の子ども」という実感が湧いてくる 第1子が「パパ」と呼んでくれないことから，「自分の子ども」という実感が湧かない／自問する 第1子と一緒にいる時間が少なく，「自分の子ども」という実感が湧かない 住民票の第1子の名前を見ることにより，「自分の子」だと実感する 第1子の世話をする／長く一緒に過ごすことにより，「自分の子」だと実感する

表1．妊娠初期から産後1か月における初めて父親となる夫の体験（つづき）

分類	カテゴリー	サブカテゴリー	コード
夫自身へ	母子関係を羨み，夫自らも関わる	母子の繋がりを感じる	臍帯や授乳場面を見ることにより，母子の繋がりを感じる／授乳場面には，夫は介入できないと思う 授乳後，第1子がそのまま母親の腕の中で寝るのは，連動しているように思う
		母子の繋がりを羨む	授乳の様子は，安心と同時に男は何もできないと感じる 沐浴は，母親の授乳に比べたら父親の絶対ではないと思う 第1子は母親を認識している／母親を見分ける能力があると思い，妻を羨む
		父子の繋がりを求めて，第1子と関わる	母親の母乳のように，はっきり父親と感られる何かが欲しいと思う 母乳が出せない分，第1子と遊んでやらないといけない 第1子に父親だと認識してもらえるように，呼び掛ける／入浴時に触れ合う もう少し第1子が成長するのを待って，父親だということを教え込もうと思う
		母親の力は大きいと感じる	第1子が母親を認識しているのは，悔しいが，一緒にいて面倒を見てくれているからだと受け止める 母乳で自然に育ててくれている，母親の力はでかいと思う
	徐々に父親になったことを実感する	「父親」について，自問することを繰り返す	第1子の誕生により，妊娠期とは全く異なる，父親になる覚悟の度合いの高まりを自覚する 父親意識は，第1子の誕生と共に急激に変わるものではないことを自覚する 妻が第1子に「パパ帰るよ」と言い聞かせているのを聞いて，「父親」だと感じる 気持ちの面で，知らないうちに自分で「パパ」と思っているのかなと自問する 「自分の子ども」／家族という認識はあるが，「父親」という実感は実際にはまだないのかもしれない 近い将来の理想の父親像はあるが，今の理想の父親像が分からない 周りの家族から，いいお父さんだと言ってもらえるように，一生懸命やろうと思う
		直接・間接的な第1子との関わりにより，徐々に父親になったことを実感する	第1子の世話や書類の届け出などをとおして，徐々に父親になったことを実感する 第1子の世話をして，一緒に長く過ごすことにより，父親なんだと自覚してくる
	心温まる3人家族を形成する	3人で新たな家族関係を築く	3人で良い家庭を作ろうと考える 妻と第1子への関わりのバランスを考える 第1子は自分の生活の一部だと感じ，第1子中心の生活に幸せを感じる
		穏やかな家庭を望む	産後早期から，3人で過ごす時間を作り，3人で過ごすことを楽しむ 妻子が自宅にいるだけで，ほのぼのした気持ちになる ほのぼのとした家庭にすることが，目標になっているため，それを心掛けている
		第1子誕生による幸福感を得る	様々なことを乗り越えた上での，第1子誕生に幸せで一杯になる いろいろな戸惑いより，第1子誕生の嬉しさが勝っている
妻へ	妻を労り，支援を継続する	妊婦の妻の健康と苦痛を気遣い，支援する	妊娠中の妻の健康とストレスを気遣う つわりや腰痛などのマイナートラブル／腹部の張りに伴う苦痛を気遣う 妊婦健診や医師の診察に同伴する 妻の心身の負担の軽減を考え，食事／家事／休息／安静などの支援をする 出産に向けて，妻を励ます
		妻の産痛を労り，支援する	妻の出産に立ち会い，産痛の苦しみを労る
		妻の育児生活の大変さを理解し，家事・育児の支援をする	産後の身体で，一日中第1子の世話をしている妻の疲労を理解する 妻の心身の負担を軽減できるように支援したいと思う できるだけ妻と一緒にいる／第1子への世話は，妻の負担軽減にもなる／休日は一日中家事をする 一生懸命育児に取り組んでいる妻を激励する 理想に近い育児をしている妻を心配する／妻が気分転換できることをして欲しいと思う
		妻の支援に伴う夫のストレスを調節する	夫の我慢が妻への心掛けだと思い，夫のストレスを調整する 仕事と家事が両立できるように，夫の欲求を我慢する努力をする
胎児／第1子へ	胎児／第1子の健康な発育を願う	胎児／第1子の健康と成長を願う	健康に育って，五体満足で生まれてきて欲しいと願う 第1子が無事に育って欲しいと願う
		胎児／第1子の健康状態と成長を確認する	超音波検査／妻の腹部の増大／胎動／胎児の推定体重などから，胎児の成長と健康を確認する 第1子の重さ／哺乳力／二重顎／1か月健診の結果などから，第1子の成長と健康を確認する
		胎児／第1子の健康を考えた行動をとる	胎児のために，喫煙制限をする／夜更かしをやめる 第1子のために，喫煙制限／手洗いなどをする
	胎児の存在を認識し，関わりを好む	胎児の存在を捉える	妻の妊婦健診／身体の変化／胎児への話し掛け／胎動などにより，胎児の存在が分かる 性別を確認する
		胎児を分かろうとする	初めて見る胎児の容姿／容姿の変化／胎動などについて理解する 胎児の特徴の想像／胎児の気持ちの解釈をする
		胎動から命という手ごたえを得る	胎動により，妻のお腹の中で生命が育っていることを感じる
		胎児との関わりを楽しむ	胎児について／胎児の名前／胎教などについて考える 胎児に話し掛ける 夫自ら，妻の胎児への関わりを真似て，妻の腹部に触れ，胎児に働き掛けることを楽しむ
	第1子に愛情を注ぎ，夫自ら世話をする	第1子に魅了される	第1子がかわいくてしょうがない，ずっと見ていたいと思う 第1子の誕生により，舞い上がった気持ちが持続する 第1子の笑顔，存在，自宅の環境に慣れてくれたことなどに，大きな喜びを感じる
		第1子に愛情を注ぐ	精一杯の愛情を注ぎたいと思う 第1子に話し掛け／抱く／頬ずりなどを頻繁に行う 第1子の生い立ちを記録に残す／第1子に色んな物を触れさせたいと思う
		第1子を分かろうとする	第1子の様子から，空腹／眠け／泣きの理由／好むこと／気持ちなどを推測する 第1子の睡眠，授乳などの生活リズムを理解する
		楽しみながら，夫自ら第1子の世話をする	無事に大きくなれるように，世話をしたい／妻と協力して第1子の育児を行っていこうと思う できるだけ第1子と一緒にいる 第1子は壊れ物だという思いから，第1子の世話は妻の補助的なことから始める 夫自らおむつ替え／哺乳／沐浴などをする 育児に対する不安より，第1子の世話の楽しみが勝っている

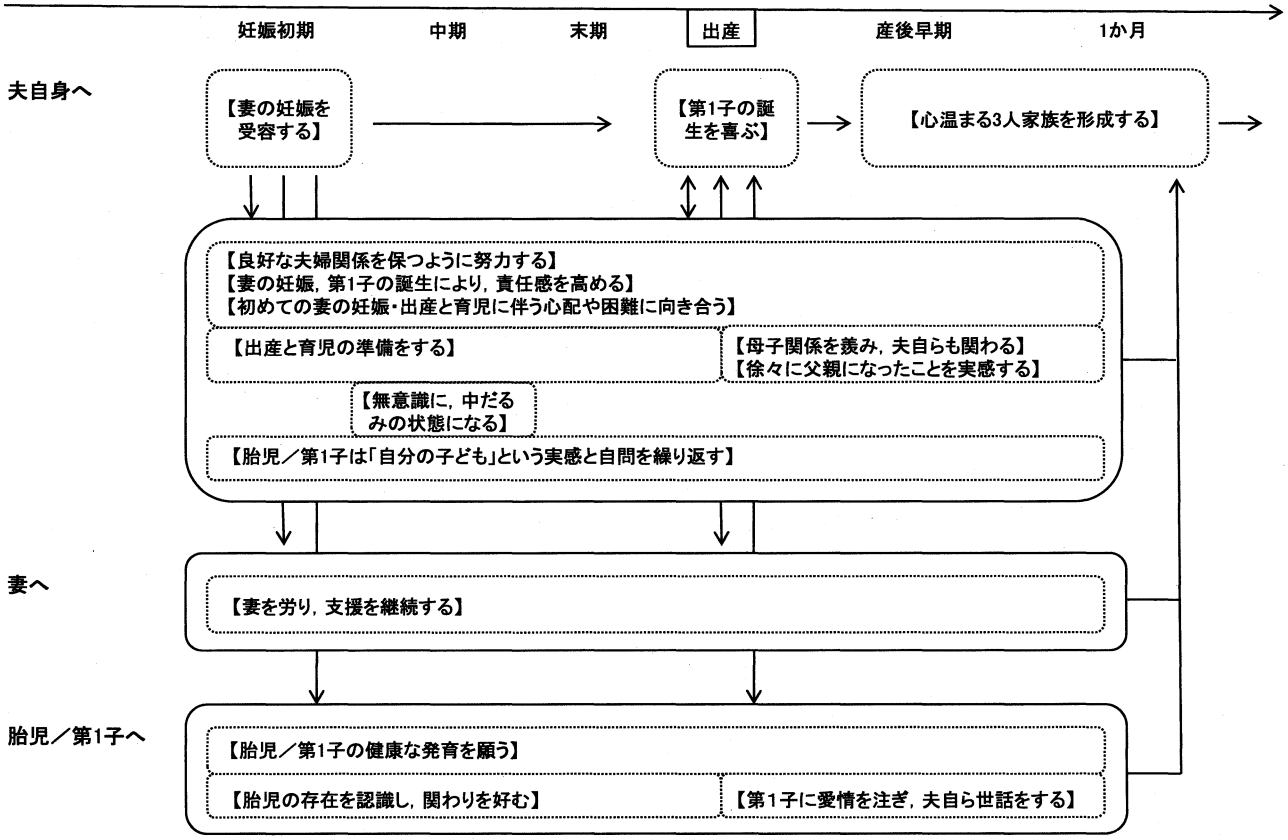

図1．妊娠初期から産後1か月における初めて父親となる夫の体験の関連図

1）初めて父親となる夫の夫自身への体験

（1）【妻の妊娠を受容する】

このカテゴリーは，〔妻の妊娠を喜ぶ〕〔親になる思いを抱く〕のサブカテゴリーで構成されていた．夫は，妊娠初期に妻から妊娠を告げられると，妻の妊娠を喜び，子どもがいる生活を想像して，親になる思いを抱いていた．

例えば夫は，「純粋に嬉しかった」と妻の妊娠を喜び，「とうとう親になるのかと…家族の，ちょっと子どもが大きくなったぐらいのことを想像して，あー楽しそうだなと（思った）」と語った．

（2）【良好な夫婦関係を保つように努力する】

このカテゴリーは，〔夫婦仲の良いことが，子育てに重要という思いを持つ〕〔良好な夫婦関係を保つように努める〕のサブカテゴリーで構成されていた．夫は，妊娠初期から生育環境や周囲の家族を参考にして，夫婦仲の良いことが子育てに大事という思いや，妻への信頼・尊敬・感謝の気持ちを抱きながら，良好な夫婦関係を保つように努力していた．産後は，これらの思いをさらに強めると共に，再認識していた．

例えば夫は，妊娠初期では「やっぱり家族が，仲が良ければいいんだわ．夫婦が良きゃね．それを見て子は育つ」と語り，産後早期では「（無事に出産をしてくれた）家の嫁さんが凄いなと思った．…尊敬の思いと感謝の気持ちと，…（産後は）さらにその思いが強くなった」と語った．そして，産後1か月では，「俺たちが不機嫌だと直ぐに分かる，こいつ（第1子）が．こいつも大事だけど，取り敢えず2人（夫婦の関係）だね」と語った．

（3）【妻の妊娠，第1子の誕生により，責任感を高める】

このカテゴリーは，〔経済面を調整する〕〔第1子の養育に対する期待を高める〕〔「人としての責任」をさらに自覚する〕のサブカテゴリーで構成されていた．夫は，第1子の誕生によって妊娠期とは数段異なる，労働意欲，養育への期待，扶養意識，責任感を感じていた．

例えば夫は，「気持ちは違うね，やっぱ（仕事を）やらんと…実際に（第1子が）いますからね．…やっぱ，いい生活をさせてあげたいし．自分の欲しいものも我慢して，やっぱり子どものためにお金を貯めないといけない」や「今まで持ってきたもの（人としての責任の柱）が，ちょっと膨らんでくるような感じ…とにかく，守っていくものがある．守るために，仕事をして，家庭を大事にということを積み重ねていく」と語った．

（4）【初めての妻の妊娠・出産と育児に伴う心配や困難に向き合う】

このカテゴリーは，〔妻の妊娠・出産と育児に伴う心配事が出現する〕〔妻と胎児／第1子への支援に困難感を抱く〕〔妻と胎児／第1子への支援に伴う困難感に対応する〕〔妻の妊娠・出産と育児に伴う心配事や困難感が安心に変わる〕のサブカテゴリーで構成されていた．夫は，初めての妻の妊娠・出産と育児に伴う様々な心配や，妻と胎児／第1子の支援に伴う困難を感じていたが，敢えてこれらに向き合って対応していた．

例えば，妻のつわりの姿を見ることが困難だった夫は，「（妻の里帰りが嫌だったと思うことがあった半面）そうゆう姿を見るよりね，向こう（実家）で好きにやってくれた方が良かった」と語った．喫煙がストレス解消法であった夫は，妊娠初期から胎児の健康を考え，自ら喫煙制限を始めていたが，妊娠中期では困難感がピークに達していた．産後早期では，「たばこを制限するのは本当に辛かったですね．未だにそうなんですけどね．やっぱり，実際に子どもが生まれてくると変わりますね．うーん．姿を見ると，同じ空間では絶対吸わないですもんね」と語った．

（5）【無意識に，中だるみの状態になる】

このカテゴリーは，主に妻のつわりが強かった夫に見られ，〔胎児存在への意識の薄れに気付く〕〔妊娠前のような生活に戻る〕のサブカテゴリーで構成されていた．夫は，妻のつわりが消失し，外見から妻の妊娠徴候が確認できない妊娠中期において，胎児存在への意識が薄れ，無意識に妊娠前のような生活に戻るというように，中だるみの状態になっていた．しかし，これによって，妻のストレスが蓄積していたことに気付くと，反省し，再び妻への支援に繋げていた．

例えば夫は，「最近は…子どものいる意識が薄れてきたというか，あんまり全然分かんないんで，…お腹も出てきたのかよく分からない状態だし，本当に（胎児が）いるのかなーっていう感じで，で，健診も1か月間行かないじゃないですか，その間，何か，何も別に，つわりもなくなっちゃって，気持ち悪いも言わないし，普通に行動できるんで，…中だるみの状態ですね」と語り，「そうゆうのが逆に何か相手（妻）のストレスを溜めているのかなって，うーん，もうちょっと気を使ってやらないといけないのかな」と反省していた．

（6）【出産と育児の準備をする】

このカテゴリーは，〔出産の準備をする〕〔育児の準備をする〕〔第1子の誕生を心待ちにする〕のサブカテゴリーで構成されていた．夫は，出産時は妻の支援をしたい，父親として妻と一緒に第1子を迎えたい，できれば立ち会い出産はしたくないなどの気持ちを抱きながら，出産と育児の準備を進め，第1子の誕生を心待ちにしていた．

例えば夫は，「今は本当にいつ生まれてもおかしくない状態なんで，…物は全部そろえて，後は時間的な問題ですね，絶対，一緒にいられるように，仕事の時間と内容を事前に調整してもらって…何をどうしたらいいとか…皆の（出産時の）データを収集している」と語った．

（7）【第1子の誕生を喜ぶ】

このカテゴリーは，〔無事な出産を喜ぶ〕〔出産体験に満足感を抱く〕のサブカテゴリーで構成されていた．夫は，母子共に無事であったこと，第1子を抱くことができたこと，助産師の助言で夫の願いどおりの立ち会い出産ができたことなどにより，大きな喜びを得ていた．

例えば夫は，「無事に，生まれてきたので良かっ

たですけどね．母子共に」や，「(立ち会い出産は)思った以上にいいもんでしたね．…一緒に，まー協力してできたなとは思いますね．なんか凄く満足しています」と語った．

（8）【胎児／第1子は「自分の子ども」という実感と自問を繰り返す】

このカテゴリーは〔胎児は「自分の子ども」という実感と自問を繰り返す〕〔第1子は「自分の子ども」という実感と自問を繰り返す〕のサブカテゴリーで構成されていた．夫は，妊娠期だけではなく，第1子誕生後も第1子の変化や反応が得られるか否かによって，「自分の子ども」と実感したり，自問したりすることを繰り返していた．しかし，産後1か月では，第1子の世話をしてきたことや，長く一緒に過ごすことなどにより，本当に「自分の子ども」だと実感できるようになっていた．

例えば夫は，産後早期では「やっぱ，抱いた時は一番ね，『はー，俺の子どもだな』」や「抱いていても温かいんですよ，…『命』っていう感じ…，『自分らの子どもが生まれたんだな』」というように実感が湧く一方で，「実感がないっていうか…（第1子が）しゃべってくれんと，『お父さん』とか…なんかないんだよね，ぴんと，『本当に，俺の子？』くらいに」と感じていた．

（9）【母子関係を羨み，夫自らも関わる】

このカテゴリーは，〔母子の繋がりを感じる〕〔母子の繋がりを羨む〕〔父子の繋がりを求めて，第1子と関わる〕〔母親の力は大きいと感じる〕のサブカテゴリーで構成されていた．夫は，授乳場面をとおして母子の繋がりを理解する一方で，母乳で繋がっている母子関係を羨み，自身の無力や母子関係のような父子関係を築きたいと焦り，自らも積極的に関わっていた．しかし，産後1か月では，一日中第1子の世話をしていることや，母乳で育ててくれている母親の力は大きいと受け止めるようにもなっていた．

例えば夫は，産後早期では「父親と感じられる何かね（僕がいないとだめだという）そうゆうふうになって欲しい」と語り，産後1か月では，「早く父親だと認識してもらえるように，なるべく（入浴時は）こう（肌を接触させ)」というように積極的に第1子と関わると同時に，「(第1子は母親を認識しているのは）悔しいですけどね．…そんだけ，やっぱ一緒にいて，面倒見ているから，やっぱり違うんだなっていうのは分かりますね」と語った．

（10）【徐々に父親になったことを実感する】

このカテゴリーは，〔「父親」について，自問することを繰り返す〕〔直接・間接的な第1子との関わりにより，徐々に父親になったことを実感する〕のサブカテゴリーで構成されていた．夫は，第1子の誕生により，妊娠期と全く異なる父親になる覚悟の高まりを自覚する一方で，父親意識は急激に変わるのではなく，直接・間接的な第1子との関わりによって，徐々に父親だと認識するものだと感じていた．そして，産後1か月では，第1子の世話をしてきたことや長く一緒に過ごすことにより，父親であることを自覚していた．

例えば夫は，産後早期では「(産後は)『パパになるんだな』っていうその覚悟の度合いというのが全然（妊娠中とは違う）…その差は激しい」と語る一方で，「生まれた瞬間から，こう自分の中で，切り替わるのかなと思っていたけど，そうは人間なかなかいかなくって，生まれてから，そうやって色んなこと（第1子の世話や書類の届け出など）をやっているうちに，やっぱり父親だと認識していくんだな」と語った．

（11）【心温まる3人家族を形成する】

このカテゴリーは，〔3人で新たな家族関係を築く〕〔穏やかな家庭を望む〕〔第1子誕生による幸福感を得る〕のサブカテゴリーで構成されていた．夫は，3人で良い家庭を作ろうと考え，産後早期から3人で過ごす時間を作り，3人で過ごすことを楽しみ，産後1か月では第1子の誕生による幸福感で満たされていた．

例えば夫は，産後早期では「一緒にいい家庭を作りましょうね…3人で」や「ずっと，川の字で寝た

いしね．フフフ，今ずっとやっているけど」と語り，産後1か月では，「幸せ一杯」「いろんなことがあった感じがして，今考えると，ああ良かったなって，無事に生まれて…戸惑うこととかもありますけど，今は，嬉しい方が勝っている」と語った．

2）初めて父親となる夫の妻への体験

（1）【妻を労り，支援を継続する】

このカテゴリーは，〔妊婦の妻の健康と苦痛を気遣い，支援する〕〔妻の産痛を労り，支援する〕〔妻の育児生活の大変さを理解し，家事・育児の支援をする〕〔妻の支援に伴う夫のストレスを調整する〕のサブカテゴリーで構成されていた．夫は，妻の妊娠・出産・育児の状態を理解することにより，妻の負担が産後はさらに大きくなっていると受け止め，一層妻を気遣い，支援を継続していた．

例えば夫は，妊娠初期では「（つわりの妻を）優先ばっかりしているんで，自分のストレスがかなり溜まるんで，それをひたすら我慢するだけですね．その我慢っていうのが，（夫の）心掛けです」と語った．出産時は，立ち会う予定でなかった夫も，「そうゆう状況ではなかった．奥さんが痛がっていたし」と急遽分娩に立ち会い，妻を支援していた．そして，産後早期では，「一緒にいてあげたい，…今は特にだけど，奥さんの負担を軽くさせてあげたい…赤ちゃんには自ら（世話を）やってあげたいと思うし，それをやることによって，奥さんもちょっとやすめるかなって」と語った．

3）初めて父親となる夫の胎児／第1子への体験

（1）【胎児／第1子の健康な発育を願う】

このカテゴリーは，〔胎児／第1子の健康と成長を願う〕〔胎児／第1子の健康状態と成長を確認する〕〔胎児／第1子の健康を考えた行動をとる〕のサブカテゴリーで構成されていた．夫は，妊娠初期から，胎児／第1子の健康と発育を願い続け，胎児／第1子の健康と成長を確認し，喫煙制限をするなど，胎児／第1子の健康を考えた行動をとっていた．

例えば夫は，「元気に生まれてきて欲しいな，五体満足で」と願い，「（超音波の写真で）結構大きくなって，手とか足とかもね，分かる」と胎児の成長を確認していた．そして，産後1か月では，「（新生児1か月健診を受けて）特に先天的なものはないと，今のところ，調べた結果，それでまたほっとしました」と語った．

（2）【胎児の存在を認識し，関わりを好む】

このカテゴリーは，〔胎児の存在を捉える〕〔胎児を分かろうとする〕〔胎動から命という手ごたえを得る〕〔胎児との関わりを楽しむ〕のサブカテゴリーで構成されていた．夫は，妊娠初期から胎児の存在を捉え，胎児の容姿や気持ちを分かろうとすることや，胎動によって生命を感じることなどにより，胎児との関わりを楽しんでいた．特に，妻につわりがなかった夫は，妊娠中期においても胎児への意識が薄れることはなく，毎日夫婦で胎児に働き掛けることを楽しんでいた．

例えば夫は，初めて超音波検査で胎児を見た時は「こんな小さくて…これじゃ（胎児かどうか）分からない」と感じ，次の妊婦健診で胎児の姿を確認することで，胎児の存在を実感していた．そして，妻の腹部の増大がまだ見られない妊娠中期においても，「（妻を真似て，妻と一緒に）お腹を触っているよ，毎日」「楽しいよ」と語った．

（3）【第1子に愛情を注ぎ，夫自ら世話をする】

このカテゴリーは，〔第1子に魅了される〕〔第1子に愛情を注ぐ〕〔第1子を分かろうとする〕〔楽しみながら，夫自ら第1子の世話をする〕のサブカテゴリーで構成されていた．夫は，第1子誕生後から第1子に魅了され，愛情を注ぎ，第1子の気持ちを解釈しようとよく観察し，楽しみながら自ら世話をしていた．

例えば夫は，出産時では「きれい…しわがない…人の子と違う」や「紫色していて，…最初はそんなかわいいもんじゃないですか，でも，それでも，『あー，嬉しいな』と思いながら，で，2・3日してもう4日目くらいになると，もうちゃんとしっかりした顔をしているんで…かわいくてね」というように第1子に魅了され，産後も「本当に，かわいい，

かわいいだけで」や「不思議なもんで，ああゆうおしめ（替え）とかも苦にならない」や「むしろやってあげたい」と語った．

Ⅳ．考 察

本研究の夫は第１子を望んでおり，妊娠初期に妻から妊娠を告げられると，喜び，親になる思いを抱くというように妻の妊娠を受容していた．そのため，夫は自然に，胎児／第１子へは健康に生まれてきて欲しいと願い，妻へは健康を気遣い，夫自身は生育環境や周囲の家族を参考に，夫婦仲の良いことが子育てには大事だという思いを持っていた．そして，妊娠初期から胎児の存在を認識し，関わることを好み，妻を労り，支援を継続し，良好な夫婦関係を保つ努力や出産・育児の準備をするというように行動していた．この結果は，森田ら[14]が，親となる男性は妊娠を機に，妻への愛情を再確認することによって，夫／父親として協力する気持ちが芽生えると報告していることや，文化的な違いはあるが，Sansiriphunら[15]が，初めて父親となるタイの男性の妊娠期のプロセスは，「胎児を保護する（守る）こと」であり，妊娠期間をとおして，夫は情報を求め，妻と胎児に良い援助をし，夫は良い父親になりたい，良い家族を持ちたいと考えて行動を修正し，出産前の時期には産後の妻子の世話の準備をしていたと述べていることを支持するものであった．

また，母子共に無事な出産と夫の出産体験の満足感による【第１子の誕生を喜ぶ】は，妊娠期の夫自身，妻，胎児／第1子への体験によって導かれると共に，産後は，妻への尊敬と感謝の気持ちや夫の責任感をさらに高め，第１子に愛情を注ぎ，夫自ら世話をし，妻の育児生活の大変さを理解することによって，妻を労り，支援を継続するなど，夫の体験を一層促していた．加えて，夫は産後早期から３人で良い家庭を作ろうと考え，行動することによって，産後１か月では，【心温まる３人家族を形成する】に至り，幸福感で満たされていた．これらの結果は，永森ら[16]が，父親は，妊娠中は出産までのことに関心の焦点が当たっており，出産後の生活については考えられなかったと述べていることと異なっていた．本研究の夫の体験が，発展的に展開していた理由は，夫が妊娠初期から，親になる思いを抱いて妊娠を受容し，良好な夫婦関係を保つように努力し，産後は，穏やかな家庭を望み，３人で新たな家族関係を築くというように，妊娠初期から産後の生活を見据えて行動していたことが考えられた．また，本研究の夫は，産後１か月において，夫婦の機嫌が悪いと，子どもが嫌がるという反応を示すことに気付き，夫婦仲が良いことが子育ての基本だということを再認識していた．よって，妊娠初期に，親になる思いを抱いて【妻の妊娠を受容する】や夫婦仲が良い家庭を理想に持ち，【良好な夫婦関係を保つように努力する】は，妊娠初期から産後１か月において，夫の体験が発展的に展開する上で特に重要であり，要になる体験であると考える．

Rubin[17]は，子どもが生まれることを受け入れることは，個人的な犠牲や自我の満足をすすんで諦めることを必要とすると述べている．本研究においても，夫は第１子を迎えるために，夫の欲求を我慢して，経済面や仕事を調整し，良好な夫婦関係の保持に努め，妻と胎児／第１子への支援に伴う困難感に対応するなど【初めての妻の妊娠・出産と育児に伴う心配や困難に向き合う】体験をしていた．特に，妻のつわりの姿をみることが困難だった夫は，妻の里帰りを受け入れることによって，妻のつわりを支援すると共に，夫自身のつわりの困難感にも対応していた．また，喫煙がストレス解消法であった夫では，自ら胎児／第１子の健康を考えて喫煙制限を始めていたが，自制できるようになるまで，長期的な困難感と向き合っていた．つわりへの夫の支援は，心身が不安定な妊婦に満足を与え[18]，喫煙制限は胎児／第１子の健康のために重要であることから，特に夫の協力が必要である．よって，看護者は，子どもが生まれることを受け入れるために，夫が困難感と向き合っている努力を理解し，労うと共に，夫婦が互いの困難感を理解し，相互に支援できるように援助

する必要があると考える．

また，妻のつわりが強かった夫では，妻のつわりが消失し，妻の外見から妊娠徴候が確認できなくなる妊娠中期において，胎児存在の意識が薄れ，【無意識に，中だるみの状態になる】体験もしていた．一方，妻につわりがなかった夫は，同じ時期においても妻の腹部に触れ，胎児と毎日関わることで，胎児の存在を認識し，胎児との関わりを夫婦で楽しんでいた．よって，妻につわりがあった場合には，つわりが消失した後の夫の気持ちを察し，改めて妻と胎児への関わりについて考えられるように，支援する必要があると考える．

本研究の夫自身の体験の中で特徴的であったのは，妊娠初期から産後1か月において，夫は胎児／第1子の変化や反応が得られるか否かによって，【胎児／第1子は「自分の子ども」という実感と自問を繰り返す】ことや，第1子の誕生後は「父親」についても，自問することを繰り返していることであった．また，このような気持ちの中で，夫が【徐々に父親になったことを実感する】には，第1子と直接・間接的に関わることや，第1子の世話をし，第1子と長く過ごすことが必要であった[19]．看護者は，これらの夫の体験を理解すると共に，妊娠初期から，夫が胎児／第1子に関心を示し，胎児／第1子の変化や反応を捉えることや，産後は第1子と関わることの重要性を伝え，父親になることへの援助をする必要があると考える．

産後早期では，夫は母乳で繋がっている母子関係を羨み，無力[20)21)]や焦りを感じており，産後1か月では，第1子に父親だと認識してもらえるように，夫自らも積極的に関わっていた．この関わりも，父親になったことを実感する体験に関連していたと考えられるが，この関わりの根本には，母子関係を羨む愁いさがある．Greenberg[22]は，父親と生まれたばかりの赤ちゃんとの間の結び付きを，「のめり込み（没入感情）」と表現し，喜び，魅力的でかわいい，美しいなどと感じるこの感情は，すべての父親に生まれつき備わっている能力であると述べている．本研究の全ての夫は，第1子の誕生後の早期から第1子に魅了され，愛情を注いでいたことから，のめり込み（没入感情）を表していたと言えるだろう．よって，母子関係に対応する父子関係があることを，妊娠中から夫に伝えることは，夫が過度に母子関係を羨み，無力や焦りを感じることなく，父親として第1子に愛情を注いでいるという自覚を高め，父親としての自信の獲得に繋がると考える．

以上より，初めて父親となる夫には，妊娠初期から，親になる思いを抱いて【妻の妊娠を受容する】【良好な夫婦関係を保つように努力する】ことの重要性や，妻と胎児／第1子の健康を願い，妻を労り，継続して支援すること，胎児／第1子に関心を示して関わっていくことの必要性について情報提供をすることが大切である．また，看護者は，夫が妊娠初期から心配事や困難感を抱いていることや，「自分の子ども」「父親」について自問することを繰り返し，父親になったことを実感していることを理解すると共に，夫の努力を労い，父子関係の形成に関する情報を提供し，夫が妻を支援しながら父親としても発達していけるように援助する必要があると考える．

Ⅴ．研究の限界と今後の課題

本研究では，夫の体験を明らかにし，夫への支援の示唆を得た．しかし，本研究の対象者は1施設の助産所で妻が第1子の出産を予定し，妻の妊娠・出産・育児に関心がある夫4人であるため，一般化するにはさまざまな事例を重ねる必要がある．今後は研究対象施設や対象者の幅を広げ，さらに継続して夫の体験を明らかにし，夫への支援について検討する必要がある．

Ⅵ．結　論

夫の体験として，15個のカテゴリーが抽出され，これらは夫自身へ向けられた11個の体験，妻へ向け

られた1個の体験，胎児／第1子へ向けられた3個の体験に分類された．夫の体験は，妊娠初期に妻から妊娠を告げられると，親になる思いを抱いて【妻の妊娠を受容する】ことから始まり，夫自身，妻，胎児／第1子に向けられた夫の体験が相互に関連し合うことによって，産後1か月では，【心温まる3人家族を形成する】に至り，幸福感で満たされるものであった．また，【第1子の誕生を喜ぶ】は，妊娠期の夫の体験によって得られたものであると共に，産後における夫の体験を一層促すものであった．夫の体験がこのように発展的に展開されたのは，【妻の妊娠を受容する】と【良好な夫婦関係を保つように努力する】の2つの体験が要になっていたと考えられた．また，夫は妻と胎児／第1子を支援する一方で，【初めての妻の妊娠・出産と育児に伴う心配や困難に向き合う】体験や，「自分の子ども」「父親」について自問を繰り返す体験もしていた．

謝　辞

本研究にご協力いただきましたご夫婦の皆様，助産所の院長先生に深く感謝申し上げます．なお，本研究は平成17・18年度科学研究費補助金（萌芽研究）の交付を受けて実施した結果の一部であり，本研究の一部は第26・27回日本看護科学学会学術集会において発表した．

〔受付　'11.07.17
採用　'11.09.18〕

文　献

1）原田正文：子育ての変貌と次世代育成支援，90-91，名古屋大学出版会，名古屋，2006
2）中央調査法NO.622，父親の育児参加に関する世論調査，http://www.crs.or.jp/backno/No622/6222.htm
3）中村紋子，片岡弥恵子，堀内茂子，他：新しく兄姉になる子どもと家族のクラス「赤ちゃんがやってくる」の実践と評価，日本助産学会誌，20（2）：85-93，2006
4）古川亮子：両親学級の実態からみた妊婦教育の課題，母性衛生，47（2）：290-298，2006
5）Rubin，R.，新道幸恵，後藤桂子訳：ルヴァ・ルービン母性論：母性の主観的体験，70-71，医学書院，東京，1997
6）木越郁恵，泊祐子：周産期における夫の父親役割獲得プロセス，家族看護学研究，12(1)：32-38，2006
7）佐々木裕子：はじめて親となる男性の父親役割適応に影響する要因，母性衛生，50(2):413-421，2009
8）岩田裕子，森恵美，前原澄子：父親役割への適応における父親のストレスとその関連要因，日本看護科学会誌，18(3):21-36，1998
9）三井（中浦）由紀子，喜多淳子：第1子の早期育児期における父親の家庭内役割行動及びその関連要因，神戸大学医学部保健学科紀要，21:63-77，2005
10）田中恵子：妊娠期の夫の身体的・心理的変化，母性衛生，44(1):24-29，2003
11）福丸由佳，中山美由紀，小泉智恵，他：妊娠期の妻をもつ夫の仕事役割の状況と妻へのサポートとの関連，母性衛生，47(1):180-189，2006
12）服部祥子，原田正文：乳幼児の心身発達と環境，206-207，名古屋大学出版会，名古屋，1992
13）箆伊久美子，二瓶良子，太田操：妊婦の主体的な出産に関する意識調査－出産場所選択と希望分娩様式について－，母性衛生，43(1)：178-187，2002
14）森田亜希子，森恵美，石井邦子：親となる男性が産後の父親役割行動を考える契機となった妻の妊娠期における体験，母性衛生，51(2)：425-432，2010
15）Sansiriphun，N.，Kantaruksa，K.，KlunKlin，A.，et al.：Thai men becoming a first-time father，Nursing and Health Sciences 12: 403-409，2010
16）永森久美子，堀内成子，伊東和弘：少人数参加型の出産準備クラスに参加した男性の父親になっていく体験，日本助産学会誌，19(2)：28-38，2005
17）前掲5），72
18）中島久美子：妊婦が満足と感じた夫の言動や態度－妊娠各期の特徴－，日本母性看護学会誌，16(1):15-21，2006
19）新道幸恵，和田サヨ子：母性の心理社会的側面と看護ケア，125，医学書院，東京，1993
20）大久保功子：初めて子供を持った夫婦の出産後3カ月間の経験世界－親になるということ（1）－，神戸大学医学部保健学科紀要，12：85-93，1996
21）塩野悦子：初めて子どもを育てる夫婦の産後3ヶ月までの相互作用，お茶の水醫學雑誌，58（3･4）：107-117，2010
22）Greenberg，M.，竹内徹訳：父親の誕生，43-56，メディカ出版，大阪，1994

The Experiences of the Husband as a First-time Father from Early Pregnancy through One Month Postpartum

Hitomi Boda[1)]　Hiroyo Hatashita[2)]
1)Akita University Graduate School of Health Sciences
2)Faculty of Nursing, School of Medicine, Shiga University of Medical Science

Key words: Husband/Father's experiences, Firstborn, Pregnancy, Childbirth, One month postpartum

This study aimed to investigate the experiences of the husband as a first-time father from early pregnancy through one month postpartum. The research was designed on qualitative descriptive research methods; semi-structured interviews were carried out with four individual husbands who were expecting the birth of their first child, from early pregnancy through one month after birth, and a continuous comparative analysis was carried out on the data.

The results of the analysis revealed 15 categories, and these were further classified into experiences focused on the husband himself, the wife, and the fetus/firstborn. The husband's experiences begin in early pregnancy by embracing the concept of becoming a parent and "accepting the wife's pregnancy" ; by one month postpartum, this shifted to satisfaction and a sense of well being at "establishing a warm family of three" through the interrelation of experiences focused on the husband himself, the wife, and the fetus/firstborn. For the husband's experiences to develop accordingly, "accepting the wife's pregnancy" and "maintaining good spousal relationships" are likely key factors. While supporting the wife and fetus/firstborn, the husband also experienced "confronting anxiety and difficulties related to first-time pregnancy, childbirth and childrearing" as well as repeated self-questioning on "one's own child" and "being a father" . These findings suggest the need to assist first-time fathers by providing information on the importance of embracing the prospect of becoming a parent from early pregnancy, maintaining good spousal relationships, and on forming father-child relationships.